鞆ヶ浦道 山吹城登城口

石見銀山と鞆ヶ浦港を結ぶこの7.5キロの道の始点は、最も近い建物からいくらか離れた緑が生い茂る丘の中腹にあるため、現在では見つけるのが難しくなっています。しかし16世紀後半には、この場所は銀山全体の中心地でした。山内集落として知られるこの場所は、銀山の監督を行う役人が拠点とする管理施設が中心にありました。その近隣には、坑夫とその家族の住居、商人が物を売る商店、さらに自らの墓地を管理する複数の寺院が建ち並んでいました。この時代の銀山は、初めは大内氏によって支配され、この大内氏が鞆ヶ浦道を作り、集落のすぐ外側の高地に山吹城を建てました。この丘の上に建つ要塞は、地方の武将が率いる一族の間で絶えず同盟・敵対関係が変化する時代において、敵の侵略から銀山および銀鉱石を海岸まで運ぶ道を守る役割を果たしました。

大内氏は、1562年に敵対する毛利氏の手によって、この要塞、さらに最終的には銀山自体の支配権を失いましたが、山吹城と山内集落はその後40年間にわたって、採掘共同体の中心的地位を維持しました。しかし、1600年に石見銀山が徳川氏の手に落ちると、その3年後には同氏の旗印のもと日本全土の統一が進み、1867年まで日本を統治することとなる徳川幕府が形成されました。新政府は山内を破棄し、山の麓にある大森地区に管理の中心地を確立することを選びました。その後、大森町はこの代官所を中心に発展し、銀の輸送については、海ではなく陸を通して尾道まで運び、そこから大阪や江戸（現在の東京）への運ばれるようになりました。現在の山内は、石造りの建物の基礎部分のみが残り、日本海をはるかに見渡すことができる山吹城の跡地は自然に覆い尽くされています。しかし、鞆ヶ浦道は今でも歩くことができ、400年以上前に森の中を歩いて重たい鉱石を運ぶのに要した、信じられないほどの労力を思い描くことができます。